

## 参考図書紹介

### 蜜源植物への養蜂家の想い

(社)日本養蜂はちみつ協会, 2005. 日本の蜜源植物. (社)日本養蜂はちみつ協会, 東京. 331 pp.

本書は, 形の上では一種の図鑑の体裁をとっているが, 図鑑としての位置づけに関してはやや心許ない. 純粋にある分野の植物図鑑として価値を見いだそうとすると不満も覚える.

例えば写真図版が玉石混淆で, 手ぶれしたもののやフォーカスの甘いものまで含まれているし, また花そのものの構造や特徴が不明瞭なものも多く, 実物との比較における便宜といった, 本来図鑑に求められる質は確保できていない. 個々の植物の説明も, 花や植物の構造的な特徴, 植物の生育や分布, ミツバチの嗜好, 栽培上の注意事項など, 植物によって記載事項がまちまちで不統一感が否めない. 最低限, 樹高や草丈, 花の大きさ, 形状など, 観察者の求める情報には応えて欲しい. 植物を蜜源として扱おうとする初学者が, 本書を図鑑として利用すると仮定して, どの程度の利用価値があるのか, 実際上の評価は難しいが, 結局もう一冊, 一般的な植物図鑑を横に置かねばという印象は正直なところ受けた. 目指されている蜜源植物の増殖においての実用性も, 補足情報が別途得られるならという条件付で評価できる程度である.

もちろん本書は, 限定数刊行であり, 観察者の手引きとして広範に利用されることは想定されていない. 「日本の蜜源植物」という本を出すこと自体が第一義の目的であったことは明確であろう. あとがきに目を通すと, 学名などあとから付加的に加えられた様子がわかるが, 最初の企画には含まれていなかったものが追加されたということは, 制作過程において, 当初の期待以上のものになりそうだからと, 転換が図られたからということか.

本書はアイルランドで開催された第39回の国際養蜂会議のコンテストに出品されたが, 残



念ながら入賞は逃してしまった. 地味な表紙が災いしたというよりは, 実際にはこの書籍の真の意図が伝わらなかったにちがいない. この本ができた経緯が伝わっていれば, この国際養蜂会議でこそ入賞した書籍であった.

この本は見方を変えると, あるコンセプトを持った一連の科学的過程の集大成としての図録ではなく, ある書籍を作るという目的に対して, 提供者の個々の気持ちをも含んだ情報が寄せ集められ, それをある(やや緩やかな)基準に沿って一冊に編纂したものであるという形になっている. 情報提供者の多くは日本養蜂はちみつ協会の会員であり, 養蜂家である. 養蜂家を寄せ集めてこの種の書籍を作ること自体が, 極めて異例なことにはちがいない.

この本には, 養蜂家が, 身の回りの植物を蜜源植物として認識しているというメッセージが込められている. 養蜂家から花への想いが集められた書籍として刊行されていること, そのこと自体の価値は, できてしまった本の形からは想像しにくい, その点を評価してアピモンディアの賞をいただければ, 各国の養蜂家にも, 自分の身の回りの蜜源植物を紹介するチャンスを与え, さらにはそれを集大成化して, いくつか写真集「世界の蜜源植物」が誕生することにもつながったであろう.

学者が作るものではなく, それぞれの花に, それぞれ紹介する養蜂家の想いが込められる形で実現すれば楽しい本になるだろう. (中村 純)